

## 《履修上の留意事項》遠隔授業のみ実施

《担当者名》林利彦 大澤昌之 前田拓 石川耕資

## 【概 要】

形成外科は、身体の主に体表部分における変形、欠損に対して、整容性と機能性の両者を修復再建する診療科である。先天性外表異常や外傷後、手術後など後天的変形における、治療意義を理解し、その手技の概略を学ぶ。

## 【学習目標】

リハビリテーションが元々、ラテン語のHabil（有能、役立つ、生きる）という言葉から生まれ、病気や怪我などをした場合に元のHabilの状態に戻す、という意味であることから、形成外科が、リハビリテーションの概念に即し、身体の主に体表部分における変形、欠損に対して、機能的かつ整容的改善を目指す外科治療学あることを理解するために、熱傷・交通事故・労働災害の外傷、先天性形態形成不全、皮膚軟部組織腫瘍、整容・美容外科、各種悪性腫瘍切除後の再建の分野における治療意義とその手技の概略を学び、形成外科が患者のQOL(Quality of Life)の向上に寄与する外科治療学であることを説明できる。

1. 形成外科の診療領域全般について概略を説明できる。
2. 高加齢医療（アンチエイジング）の精神と各種美容外科手術について説明できる。
3. 創傷治療の基本、顔面外傷に対する形成外科治療、および熱傷の治療について説明できる。
4. “あざ”のレーザー治療、硬化療法について説明できる。
5. 様々な皮膚および軟部組織の悪性腫瘍の診断と治療について説明できる。
6. 各種悪性腫瘍切除後の組織欠損に対する再建外科について説明できる。
7. 唇裂・口蓋裂に対する治療について説明できる。
8. 頭蓋顔面および手指の先天異常に対する治療について説明できる。

## 【学習内容】

| 回 | テーマ                       | 授業内容および学習課題   | 担当者  |
|---|---------------------------|---|------|
| 1 | 形成外科学総論                   | 外傷(熱傷、顔面骨折)、先天性形態形成不全(唇顎口蓋裂、小耳症、多指症)、皮膚軟部組織腫瘍(母斑、血管腫、皮膚癌)、美容外科(眼瞼部、乳房)、再建外科(頭頸部再建、乳房再建)、頭蓋顔面外科および手術手技など、形成外科の診療領域全般について概略を説明する。 | 林利彦  |
| 2 | 整容・美容外科                   | 加齢に伴う外観の衰えに対する高加齢医療(アンチエイジング)の精神と各種美容外科手術について説明する。  | 林利彦  |
| 3 | 悪性腫瘍                      | 悪性黒色腫を中心として、様々な皮膚および軟部組織の悪性腫瘍の診断と治療について説明する。  | 前田拓  |
| 4 | 再建外来                      | 脳神経外科、耳鼻咽喉科、消化器外科、整形外科領域において各種疾患のために広範囲に切除をした後の欠損部に対し、いろいろな組織移植法を用いた再建外科の進歩について説明する。  | 前田拓  |
| 5 | 先天性形態発育不全1:唇裂・口蓋裂         | 唇裂・口蓋裂における形態、咬合、そして言語に対する治療について説明する。  | 大澤昌之 |
| 6 | 先天性形態形成不全2:頭蓋顔面および手指の先天異常 | 頭蓋骨縫合早期癒合症や頭蓋顔面領域の各種症候群、小耳症などの耳介形成不全、多指症などの手指の異常の診断と治療について説明する。   | 大澤昌之 |
| 7 | 創傷治療・顔面外傷・熱傷              | 創傷治療の基本、交通事故や労働災害等で生じる顔面の傷や骨折に対する形成外科治療および熱傷の初期治療と瘢痕に対する治療について説明する。   | 石川耕資 |
| 8 | “あざ”のレーザー治療、硬化療法          | 血管の異形成による“赤あざ”、皮膚色素の異常による“黒・茶・青あざ”、腫瘤状になる血管やリンパ管の異形成に対し、レーザー治療や硬化療法を用いた治療の実践について説明する。   | 石川耕資 |

## 【評価方法】

レポート 100%

【備 考】

参考書 : 平林慎一 他 編「標準形成外科学(第7版)」医学書院 2019年  
波利井清紀 他 編「TEXT形成外科学(第3版)」南山堂 2017年

【学習の準備】

参考書で、時課の授業範囲を予習し、前もって専門用語の理解につとめておくこと。(80分)

授業で配布した資料と参考書を用いて、授業内容についての理解を深めること。(80分)

【ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)との関連】

(DP3)言語聴覚士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。